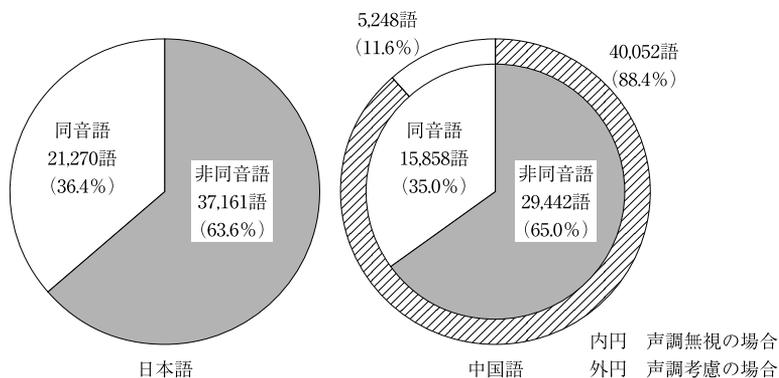


図 同音語の数——日本語と中国語



解説 日本語には、同音語が多いといわれる。日本語および中国語の辞書で、同音語の数を調べた結果である。対象となったのは、次の辞書である。

日本語…新明解国語辞典（金田一京助他編，1972年，三省堂）—58，431語

中国語…漢語拼音詞彙（増訂稿）（中国文字改革委員会詞彙小組編，1963年，文字改革出版社）—45，300語

出典 望月八十吉『中国語研究学習双書13 中国語と日本語』（光生館，1974年）。1981年の改訂版では、数値が変わっているが、ここでは原版によった。

（林大 監修『図説日本語による』）

別表 当用漢字音の頭音・末音の分布

(新潮国語辞典巻末付表により算出) S21 告示および S29 補正を併せる。

あたましり	なし	k+	g+	s+	z+	t+	d+	n+	h+	b+	m+	r+	w+	計	
1	-a	1	30	6	9	1	3	4	1	3	2	3	1	2	66
2	-ai	2	20	8	24	5	19	7	1	10	8	5	3	1	113
3	-aku	2	18	4	8	0	6	2	0	8	5	2	4	0	59
4	-ati									1					1
5	-atu	1	6	1	7	1	1	2		2	4	1			26
6	-an	4	44	8	11	2	13	8	4	20	7	4	5	2	132
7	-i	21	35	11	46	20	11		4	19	5	3	8		183
8	-iki				4	2				1			1		8
9	-iku	1	1			1	5		1				1		10
10	-iti	2	1		2				1						6
11	-itu	2	2		7	2	2			4		1	3		23
12	-in	11	12	2	27	8	6		5	4	3	2	7		87
13	-u	5	12	2	5	3	1			21	7	6	2		64
14	-ui				14	2	4						4		24
15	-ur		1	3	3		2			2					11
16	-uku									9					9
17	-utu		2							2	2				6
18	-un	2	4	3	1					7	3				20
19	-e	5	5	3	2	1									16
20	-er	10	28	3	31	2	23	1	1	10	1	7	11		128
21	-eki	6		3	14		6			2			2		33
22	-etu	4	7	1	10	2	5		1		1	1	4		36
23	-en	13	29	11	24	7	8	4	5	7	3	3	5		119
24	-o	1	19	13	11		10	5		6	7	2	3		77
25	-or	13	61	8	30	9	36	9	6	21	21	6	8		228
26	-oku	4	9	2	9	5	7	3		1	6	3	3		52
27	-otu	1	1		2		1			1	1	1			8
28	-on	5	12	3	5	1	1	2		3	2	4	1		39
29	-ya	2			12	1	1								16
30	-yaku	6	3	2	9	3	2			1	1	1	1		29
31	-yu	5			14	7									26
32	-yui	2													2
33	-yur	15	20	1	22	12	12		3			7			92
34	-yuku				6	1									7
35	-yutu				1	2									3
36	-yun				3	11									14
37	-yo	5	9	3	9	7	2		2				3		40
38	-yor	20	28	5	61	23	24		1	8	5	4	14		193
39	-yoku	5	3	1	9	1	2						2		23
	計	176	422	107	452	142	213	47	36	173	94	59	103	5	2,029

* * *

(1973-8-13)

ていくと考えられるが、それも漢語の概念規定力とすぐれた体系性とに深く関わっている。意味分野としては、和語が抽象的分野に少ないので、抽象名詞を造りやすい漢字・漢語は固有日本語の欠を補う点で特別重要な位置をもっているのである。

△ △ △

以上、中国と韓国の現状と対比しながら、現在の日本語の文字・表記のかなめとなる漢字・漢語を鳥瞰し、研究・教育・学習と関わる主要事項に言及した。

われわれは、日本語と漢字、日本人と漢字の深く強いきずなをあらためて認識する必要があるだろう。

注

- ① 詳しくは、国立国語研究所編（2003）『国語年間 2003年版』などを参照されたい。
- ② 法制審議会の人名用漢字部会は2004年6月11日に578字の追加字案を発表した。小論執筆中の8月13日に最終的に計488字を新たに使用可能とすることを決定した。
- ③ 2004年7月29日文化庁発表の「国語に関する世論調査」
- ④ 安本美典（1963）「漢字の将来」（『言語生活』137号）。
- ⑤ 魯迅の『阿Q正伝』の“Q”やカラオケに当たる「卡拉OK」の“OK”など、ごく珍しい大文字のラテン文字の使用が見られる。
- ⑥ 国立国語研究所報告56（1976年）『現代新聞の漢字』（秀英出版）。
- ⑦ 国家語言文字工作委員会・国家標準局共編（1992）『現代漢語字頻統計表』（語文出版社）。
- ⑧ ①に同じ。

参考文献

- 1 玉村文郎（1973）「語形と語性」（『日本語と日本語教育—文法編—』文化庁）
- 2 ———（1991a）「文字列について」（『日本語学』2月号）
- 3 ———（1991b）「専門用語の性格」（『専門用語研究』3）
- 4 ———（1993）「日本語教育における漢字—その特質と教育—」（『日本語教育』80号）
- 5 ———（2002a）「現代日本語の意味構造」（『現代日本語講座』4 語彙 明治書院）
- 6 ———（2002b）「対照語彙論」（『朝倉日本語講座』4 語彙・意味 朝倉書店）

会』で引き続き協議検討が重ねられているが、2003年1月に発表された第1次の言い換え提案^⑧で扱われた62語は、48語（77.4%強）が漢語に、9.5語が混種語に、4.5語が和語にという内訳で、漢語が圧倒的多数を占めている。（語種を異にする2つの言い換え語が示されている場合に「.5」として数えた）このような言い換え案や明治以降の専門術語に漢語が多くなる理由として2つの事項が考えられる。それは1つには、漢語語彙のすぐれた体系性であり、いま1つはわが国における初等中等教育における漢字指導の成果の高さである。前者では、月名、「分子・原子・電子・陽子・中間子・素粒子・遺伝子」などの「子」、名詞「系統」に接辞として添加される「一性／一的／一化」によって、抽象名詞・形容動詞語幹・サ変動詞語幹（または行為名詞）が整然と体系的に派生されること、「非—／反—／親—／超—／無—／汎—」などの接頭辞成分による派生語づくりの自在さ、「国内」と「国外」をまとめて圧縮した「国内外」や「入金」と「出金」をまとめて圧縮した「入出金」のごとき並列複合語の縮約語づくりができることなどを挙げることができる。後者は、日本の諸学校において漢字の教育が重視されてきた成果が、国民の漢字理解力と漢字運用力とを支えていることである。「アイデンティフィケーション」のような外来語の言い換えは容易ではないが、「インサイダー」は「内部関係者」とすれば、分からない人はいなくなるであろう。「アウトソーシング」の「外部委託」、「インターンシップ」の「就業体験」などは歓迎すべき言い換えである。日本語が日本国民全体のもものとして生き生きと使われていくためには、既得の日本語力が有効に働く環境づくりと造語の際の基本姿勢が重要である。

“OCR”よりも「光学式文字読み取り装置」、 “NIES”よりも「新興工業経済地域」、 “START”よりも「戦略兵器削減交渉」が正確に概念把握ができる。「読み取り」や「受け付け」など和語成分が使われるのも分かりやすくよい。多単位の長大語形であっても、極力正確な伝達を図る努力をすべきであり、そのためには、漢字列の特長を十分に生かす必要がある。

今日、各地の大病院に設けられている“Perinatal Center”は当初「産前産後母子健康管理センター」と訳されていた。非常に分かりやすい懇切丁寧な訳語である。病院内部では、長いということもあって「ペリネタル」と呼んでいた。この語は、現在では「周産期診療部」という圧縮された形になっているが、当初の訳語（混種語）は、基本漢字さえ知っていれば、どういう施設・機関・部署であるかがすべての日本人に分かる好訳語であると言える。日本人が、漢字・漢語から離れられないのは、実はこういう点に真の理由があるのではなからうか。

漢語は、基本的な日常語のほか、学術用語・専門用語・職域用語として、今後も増え

縮約形をもたない多単位の長大語は医学用語に多い。「遺伝性球状赤血球症」「悪性漿液性蜂窩織炎」「急性化膿性顎骨骨髓炎」「先天性肥厚性幽門狭窄症」「中毒性結節性甲状腺腫」などである。同一語内に「性」という接尾辞的成分が複数回用いられているものが少なくないことが注目される。

漢語の造語力の強さは、和語の造語力の弱さを補って余りあるもので、「簿価」（簿記・株式用語）、「期首」（ある期間・期限のはじめ）、「擬傷」（地上営巣をする鳥類の敵をあざむくためにはぐらかし動作）、「抗酸菌」、「亜急性」、「症候群」などが挙げられるが、最後の2者はそれぞれ“subacute”，“syndrome”の訳語として使われている。

このほか「美肌」「路肩」「立米」「四駆」など、語義や先例の別語から生み出された漢字列がある。これらには重箱よみや湯桶よみのものが多い。「立米（リュウベイ）」は「立方米（メートル）」の縮約形で、先例の「平（方）米」に倣ったものであり、「四駆（よんく）」は「四輪駆動（車）」の縮約形である。これらは必ずしも字音によるものとは限らないが、表語単位としての漢字の性質がよく活かされていると言える。

他動詞と目的語とから成る複合構造（中国語学の〈動賓結構〉）は、日本語と中国語とでは語順を異にする。中国語（漢文）式には「開会・取水・送電」のようになるわけで、今も「脱衣かご」「奪三振」「与四死球」「預金」「禁酒」「脱輪」「絶食」のような語順が生きている。しかし、その一方で「酒造業」「券売機」「杯洗」「霊送鳩」のごとき日本語の語順に従ってしまったと考えられる漢語が生まれている。このような和習の漢語が今後漸増するかもしれない。

5 漢語の語義

漢語は、和語・外来語に比べると対象を過不足なく的確に限定し指示する傾向が強い。「日まわり」よりも「向日葵」の方が植物であることを指示している点で、はるかに限定性に富んでいて、かつ具体的である。「あじさい」に対する「紫陽花」、「朝顔」に対する「牽牛花」などについても同様の指摘ができる。概して和語の方はどこか文学的で感覚的な命名によるものが多いようで、漢語の方は即物的で分析的な命名によるものが多いと見られる。「○○花」「○○草」「○○鼠」「○○虫」のごとく科名・類名・目名などを末尾にもつ名詞を配するものが多いことに端的に現れている。

小論の「はじめに」において触れた外来語の言い換えは、動機としては一般人に理解されにくいという、言語にとっては最も基本的な意志疎通上の要求に発している。今後の方向としては多くは漢語への転換という形で解決が図られることが予測される。2002年8月に国立国語研究所（現在は独立法人となっている）が設置した『『外来語』委員

動个作了大为后人成到方可分度出
 练下就来能面体过于如三术二对也
 种力高法进

- B 的一是在不了有和人这中大为上个
 国我以要他时来用们生到作地于出
 就分对成会可主发年动同工也能下
 过子说产种

漢字圏や半漢字圏の学習者には、字形・字義の教育はそれほど重視する必要はないが、字音については入念で徹底した指導が求められる。有気音／無気音の対立と有声音／無声音の対立、n 韻尾・ŋ 韻尾（・m 韻尾は韓国のみ）と撥音などは最も大きな点である。

「呉」と「吳」,「東」と「东」,「車」と「东」,「対」と「对」,「直」と「直」,「営」と「营」など、日本の常用漢字と中国の簡化字の間には字形に微妙な違いがあるので、この変換時に特に注意する必要がある。

4 漢語の語構成

漢字の個々は前述したように語として機能するものであるから、日本語の中では自立性をもっていない音よみの漢字1字が複合語や派生語の構成成分として活発に働く。このような音よみの漢字成分の語構成論上あるいは形態論上の働きに着目して〈字音形態素〉という呼称が行われるようになった。1963年に初版が登場した『岩波国語辞典』は〈漢字母項目〉を立て、造語成分としての機能を辞書において示した。〈字音形態素〉は複合語構成・派生語構成においてとりわけ頻繁に用いられ、語の増殖の大きな因子となっている。しかし、語の結合が容易に、また自在に行われるため、語形の長大化が生じやすく、多単位結合による複合語の量産がまた反作用としての縮約化を必至のものとする傾向を内蔵しているわけである。

電(子計)算機,入(学)試(験),臨(時)教(育)審(議会),原(子力)発(電所),
 (日本美術)院展(覧会),国(民健康)保(険),刑(事)訴(訟)法,最高裁(判所),
 回数(乗車)券,(地震)予知連(絡会),(日本労働組合)総評(議会)など、
 頻用されるものには縮約形がよく使われる。上例中の「院展」「予知連」「総評」などの縮約形は、非縮約の原語に復元することが困難で、語義把握が容易でないところに問題を残している。「総評」はそれだけで「概評」の意味の語として用いられるものである。「国体」は「主権の所在によって区別される国家の形態」を指すが、同時に「国民体育大会」の縮約形でもある。

% (延べ語数で71.8%) に次ぐ第2位の語種であって、異なり語数で40.0% (延べ語数で23.6%) を占めている。書きことばと話しことばとは漢語の使用態様になりの開きが見られるが、異なり語数としては、漢語がなじまないと考えられる話しことばの世界においてもかなり活発に用いられていることが分かる。延べ語数で23.6%という使用率は、4語に1語の割合で漢語が用いられていることを意味し、「門・玄関・空気・駅・洗濯機・本・電気・鉄道・野球・昼食・休暇・宿題・問題・質問・検査・乗車・郵便・役・番・量・住所・夫婦・会社・機械・計算・胃・腸・天気・正月・失敗・舞台・地下…」等々の漢語を使った生活をしていることを反映している。このような漢語は、漢字という媒体を介さずに表現され、理解されているわけで、中国や韓国における話しことばと同じように機能していることは明白である。

次に現代日本語の中で漢字がどのように用いられているかを構成別・音訓別に見てみよう。自立用法 (単一の漢字のみ、またはそれに仮名の付いたもの)、結合用法 (2字漢語に相当するもの、または漢字2字によって表記されている和語・混種語、およびそれらに仮名が付属しているもの)、接辞的用法の3種の用法に分ける。

音よみの漢字では結合用法が81.8%で最も多く、次いで接辞的用法が16.2%、自立用法が2.0%となる。訓よみの漢字では自立用法が第1位になり53.9%を占め、結合用法が36.2%、接辞的用法が9.9%となる^⑥。音よみの漢字が主として結合用法で用いられ、自立用法が少なくなるのは自然なことであり、訓よみの漢字が逆転して自立用法の方が多くなるのも当然であろう。3種の用法が訓よみの場合、率の上で接近するのは、熟語構成と関係が深い音よみの漢字が結合用法中心になるのとは対照的である。韓国では固有語には勿論漢字を当てることはないので、日本語の訓よみの漢字の多様さと自立中心という特徴は、中国・韓国との大きな相違点となっている上に、漢字圏という中にも研究・教育・学習の各面で大きな配慮や深い注意が必要とされることがわかっていく。

漢字を使用頻度順に見た場合、上位にはおおむね画数の少ない基本漢字が並ぶ。漢数字、方位名詞、単位名詞、七曜名や接辞用法の漢字である。「一・二・十・百・年・月・日・時・所・大・長・東・西・市・町・村・国・方・本・人・円・内・上・中・下・的・化・性・不・非・未・無・然・超」などが最も基本的のものと言える。現代社会では、このほか画数が少なくない「電・議・機」なども比較的早期に学習しなければならない漢字である。ここに中国における漢字頻度調査表の上位50字を紹介しよう。Aは「文体生活類漢字頻度」、Bは「社会科学・自然科学総合漢字頻度」である^⑦。(いずれも降頻順)

A 的一是在有不和吋上要用中这音以

一般式の各音素がすべて出現するときの字音は、多く C_1 が /s/ または /z/ の場合である。つまり /juku/, /jutu/, /jun/ の前に /s/ または /z/ がある。「宿, 出, 春, 熟, 術, 純」のごとき漢字の字音の場合である。(C_1 が /n/ の場合の「若」, /r/ の場合の「略」などもある。)

上の一般式の C_1 は子音音素を指しているが、こと漢字音に関する限り /p/ は除外される。「出発」「反比例」「運搬」「頓服」「一本」などの2字目の漢字の音は /p/ を頭子音とするものであるが、それは臨時的・環境的変容であり、語頭では「発言 (ハツゲン)」「比例 (ヒレイ)」「搬入 (ハンニューウ)」「服用 (フクヨウ)」「本日 (ホンジツ)」のようにハ行音である。語頭 (字頭) に /p/ が現れない—これが、漢語語彙の顕著な特徴である。頭子音 /p/ は、外来語に多く、和語では音象徴語や俗語にしか現れないという外形的徴標によって、語種の識別・認定に利用できる音素である。

別表の「当用漢字音の頭音・末音の分布」からも知れるとおり、個々の子音音素・半母音音素・母音音素が漢字音として均等に用いられているわけではない。頭子音として最も多く用いられているのは /s/ で、/k/ がこれにつづく。逆に少ないのは /n/ で、/d/ や /m/ がこれにつづく。頭子音 /n/ は、漢字音としては極端に少ない。(もっとも、日本語語彙の全体としてもナ行で始まる語は少なく、「ぬ」を語頭にもつ語はきわめて少ない) 漢字音「ヌ」は、『広漢和辞典』によっても「奴努拏怒怒拏」の6字を挙げるのみで、しかも多くは漢音「ド」として使われるものである。国語辞書における「ヌ・ぬ」の見出し項目には、「奴婢 (ヌヒ)」のみ、または「奴婢」と「奴僕 (ヌボク)」が見られるだけである。これらも現代語としては半ば死語化していると見られるもので、僅かに日本史用語として使われるに過ぎないであろう。さすれば、/ヌ/ という拍は、漢字音の存在しない空白と考えることができる。「常用漢字表」にも「奴・努・怒 (ド)」はあるが「ヌ」の項には漢字が挙げられていない。

漢語は、和語・外来語に比して形としては短く、特定の形に語が集中しやすい (例えば、/si/, /so:/, /ki/, /ko:/, /sjo:/, /to:/ など) ために大量の同音語が出現して、文脈に依存する率が大きくなり、また書きことばの用語に傾きやすいという宿命をもっていることは否定しがたいのである。

3 語彙調査から見た漢語

よく指摘されるように、現代日本語の中の漢語は、書きことばにおいて異なり語数で47.5% (延べ語数で41.3%) を占めていて、語種別に分けた場合には最もよく用いられている語種である。また話しことばにおいても異なり語数で第1位を占める和語の46.9

2 漢語の語形

日本語の語彙全体の中で、漢語はどんな語形上の特徴をもっているだろうか。日本漢字音の構造・拍数(長さ)・語頭音の分布・語末音の分布などに分けて考察する。

日本漢字音はすべて1拍か2拍かのいずれかで、3拍以上のものは存在しない。子音音素をC, 半母音音素をS, 母音音素をV, 引き音節をV', 撥音節をNとして、すべての漢字音を表す一般式を作ると、

$$\begin{array}{c}
 [1C_1(+1S_1)+]V_1 \left[\begin{array}{l} \text{---}V' \\ \text{---}+N \\ \text{---}(1C_2+)1V_2\text{---} \end{array} \right] \\
 \text{核母音} \\
 \longleftarrow \text{第1拍} \longrightarrow \longleftarrow \text{第2拍} \longrightarrow
 \end{array}$$

となる。[] や () の中は非必須成分である。あらゆる漢字音に共通する成分は核母音とも考えられる V_1 である。裏返して見れば V_1 以外はゼロであることもあるわけである。Sは /j/ と /w/ であるが、現代の字音としては /w/ は母音 /a/ の直前にしか現れず、その場合には C_1 が現れない。また /j/ は母音音素 /a, o, u/ の前に現れ、/ヤ, ヨ, ユ/ という拍を形成するほか、冒頭の C_1 のあとにも出現するので /キャ, リョ, ジュ/ などの拗音拍を形成する。単一拍を形成する1拍字の拗音は、/キャ, キョ, ギョ, シャ, ショ, シュ, ジャ, ジョ, ジュ, チャ, チョ, チュ, ニャ, ニョ, ニュ, リョ/ の合計16種しかなく、/チュ, ニャ, ニュ/ の3種の拍は稀用に属する漢字の音である。文字列「ヒユ」は漢字拍としては存在しないから「比喩」の誤記と解すべきことが多いであろう。第2拍をもつ2拍の漢字音としては /ワン, ワク/ や /キヤク, ジュン, ヒョウ, リヤク, ギユウ/ などがある。半母音 /j/ と /w/ とでは、明らかに /j/ の方の出現率が高い。

促音拍は独立の漢字音には現れない。熟語の前項要素となった漢字成分の末尾部が /キ, ク, チ, ツ/ である場合にのみ、条件によって促音化する。「出世」「絶筆」「的確」「七宝」「客観」などの例が挙げられる。

引き音節 V' は V が /a/ と /i/ の場合には現れない。マー, カー, シー, ヒーのような漢字音は存在しない。

上の一般式の第2拍の C_2 と V_2 には制限があつて、 C_2 は /t/ か /k/ に限られ、 V_2 は /i/ か /u/ に限られる。したがって、 $(1C_2+)1V_2$ は /キ, ク, チ, ツ, イ/ に限られる。第2拍が $1V_2$ のみになるのは、「海(カイ)」「大(ダイ)」「類(ルイ)」など /イ/ の場合のみである。

が行われているために、同音語の多い漢語についてはハングル表記の直後の（ ）の中に漢字表記を示して語義の識別に役立っている場合が多い。これは日本の近代の文章によく見られた漢字表記とルビに比せられるもので、二重表記を余儀なく用いるところに韓国の今日の言語事情がうかがえる。例えば양식 [jaŋ sik] の「良識」「洋式」「様式」「養殖」「糧食」「両式」や사면 [samjon] の「四面」「赦免」「斜面」「絲麪」「辞免」などでは、日本漢字音よりも目が粗くなるために同音語率が大きくなり、二重表記が避けがたくなっている。

現在の日本では、公文書や新聞の紙面では常用漢字を基準にすることが申し合わされているため、二重表記は戦前に比してはるかに減っているが、国有名詞や動植物名には特殊な表外音訓がよく用いられているので、①ルビ式、②（ ）式の両方が行われている。例えば「^{ろつぜん}忽然」「^{なにがし}何某」「^{はとう}波濤」「^{こぞみ}濃墨」「^{とうらい}東萊」など、また「岸田 実 (きしだ・みのる)」「蛞蝓 (なめくじ)」「葡萄 (ぶどう)」「魍魎魍魎 (ちみもうりょう)」「不如帰 (ほととぎす)」などである。新聞や国語教科書、短歌・俳句・川柳などは縦書きであるため①のルビ式が現在も少なくない。横書きでは漢字(列)の上に付記するよりは()の中に音訓を示す方が多い。(日本語教育の教科書の中には、音訓を示す仮名を漢字列の下に付記するという方法で、漢字学習の効果を期待するものがあることを述べておこう)。「梅雨」に熟字訓「つゆ」が認められていても「バイウ」という語として表現したければ(語形) や(語義) を特定するために二重表記を採らなければならないのが、日本語のかかえている問題である。「下手」「黒子」「和尚」などは表記形は単一であっても、語(語形)としては複数である。「間人(たいご)」「海部(かいふ)」「浮気(うき)」「栗花落(ついでり／つゆり)」「八月一日(ほづみ／ほうづみ)」「阿武(あんの)」「神戸(かんべ／こうべ)」などは副表記なしでは読みが決まらず、したがって特定ができない例である。韓国と日本では、ハングルによる表音性(＝語形の特定)を優先させるか、漢字による表意性・イメージ・伝統を優先させるかの違いがあって、表記法・表記態度に対照的なところがある。

漢字に対する距離としては、中国→日本→韓国の順に直接性から間接性に移行する。日本語の研究や学習に際して求められる負担は、おおむね中国人には軽く、韓国人にはやや重いはずである。日常、漢字にどの程度接しているかという漢字環境も、広義には学習教育の環境の一つと捉えられ、新聞・雑誌・看板・掲示・道路標識などの漢字が身近な教育上の良き刺激となることは否定できない。

以下、漢語の語形・漢語の使用率・漢語の語構成・漢語の語義等に分けて、現代日本語における漢字と漢語を総覧する。

され、長い使用の歴史をもち、さまざまな増殖を続け、周辺諸国に伝播した〈漢字〉と漢字によって成り立っている〈漢語〉が重要な環になると考えられる。現代日本語の教育のみならず、日本語の対照的研究のためにも、〈漢語〉を軸にした研究が必要であり有効である。

1 漢字の字形と二重表記

今日、字体としては地域・国により繁簡両体のいずれかが行われているが、なお漢字を唯一の文字として用いる中国と、^⑤ハングル中心になっている韓国と、漢字と2種の仮名を併用している日本というふうには、三者三様である。さらに、日本と中国では漢字を常用と非常用とに大別して一定の制限を行っているため、一般国民の制限漢字（表外字）の識字力はきわめて低いことが指摘されている。漢字そのものの略体化（日本では「常用漢字表」の字体、1949年に告示された「当用漢字字体表」による。中国では、1986年に発表された「簡化字总表」による）を概観すると、日本では、①常用漢字と制限漢字の間に大きな境界線があること、②常用漢字の中にも画数の多い漢字がかなり見られること、③中国の簡化法と比べると字義と旧字形に対する考慮が大きいことなどが指摘できる。これに対して中国の簡化法は、字形を考慮しつつも字音に重点をおいた積極的な統合的簡略化を目ざしている点に特徴がある。日本語では、「採」と「采」、「発音」と「撥音」、「独」と「濁」、「売」と「買」のような一貫していない字形が存在する。これらは当該字が常用漢字であるか否かによるものであるが、学習者には難しいことであろう。中国では、「驚」を「惊 jīng」としたり「郵」を「邮 yóu」としたりするなど、字音本位の省画化が進められている。その結果「发」が「發 fā」と「髮 fà」の2字の簡化字となるなど、大胆とも言える統合が行われているが、日本と違って、漢字の声調を異にする場合には同字異語の識別が可能であるためである。ここに日本における漢字と中国における漢字の働きの相違点が存在するのである。日本における漢字が書きことばの中で使われることが多いのに対して、中国では話しことばとの距離が小さいのである。これは、中国語としては本然の姿である。

漢字はもともと単音節の単語を表すもので、〈表語文字〉(logoid)と呼ばれるべき文字である。このような漢字の本質は、中国語圏ではほぼ100%生きていて、近代に入ってから、「氣(qīng)」などが造られている。これは「氣」と「輕」による新字で「水素H」を表す。「氟」は気体元素「弗素F」を指す漢字である。このように1字化(単音節化)するところに中国語の本性が見られる。中国とは異質の言語圏である韓国と日本では、当然漢字は多くの変容をこうむっている。現今の韓国ではハングル中心の表記

て、時には誤りと気付きにくいような誤記がまかり通ることさえある。単純な誤変換とちがって、「科料」と「過料」,「意思」と「意志」,「付託」と「負託」,「控訴」と「公訴」,「共同」と「協同」のような対の場合には誤記が発生しやすい。このようなミスは、やはり文章作成者の側に漢字・漢語についての正確な知識が欠けていることに原因がある。現代日本語が、〈漢字〉という文字の使用から絶縁しにくいのは、日本語の語彙の構造と深い関わりのあることであって、非常に基本的な問題である。現代日本語の中には、無視することのできない大量の、かつ基本的な漢語語彙が存在し、それが語彙という無限集合の重要な部分を占めているからである。基本的な漢語をいくつか例示しよう。

(A)書きことばの中の基本漢語

一, 二, 様 (ヨウ), 十, 三, 五, 二十, 六, 的 (接辞), 年 (ネン), 八, 三十, 七, 四, 円, 九 (キュウ), 百, 万, 零 (レイ), 月 (ガツ), 日本, 五十, .5 (テンゴ), 第, 者 (シャ), 方 (ホウ), 自分, 人 (ニン), 億, 千, 僕, 問題 など

(B)幼児の理解語彙の中の漢語

御飯, 牛乳, 茶碗, 玄関, 階段, 二階, 服, 電気, 僕, 先生, 幼稚園, 学校, 冷蔵庫, 自動車, 勉強, 教室, 絵, 方, 返事, 遊戯, 一, 二, 三, 劇, 本, 帽子, 鉛筆 など

(C)留学生の必修漢語

留学, 学生, 税関, 学校, 門, 教科書, 辞書, 先生, 教室, 復習, 漢字, 日本, 国籍, 年齢, 氏名, 駅, 水道, 電話, 円, 駅, 飛行機, 試験, 時間, 教会, 病院, 外国人, 郵便局, 登録 など

(A)は、国立国語研究所報告21 (1962)『現代雑誌九十種の用語 (第1分冊) — 総記および語彙表一』の第2表「使用率順語彙表 (全体)」の第100位までの漢語および漢語成分を抄出したものである。「四 (よん)」「四十 (よんじゅう)」は漢語ではないので掲出しなかった。

(B)および(C)は筆者の見解によって選んだ漢語語彙であるが、相互に補完されえる初級レベルの漢語である。(B)には27語, (C)には28語を挙げた。

漢語は通例漢字で書き表され、かつ音読みされるものである。定義上、漢字という文字と強く結びついているわけであるから、日本語が将来にわたって漢語語彙を大幅に削減するか、全面的に使用をやめなければ、漢字全廃をただ単に〈文字・表記上〉の問題として処理することが不可解なことは明白である。

語彙について分析的に考案するときは、語形・語数・語種・語構成・語義などの諸項に分けて扱うのが一般的である。いわゆる漢字圏としてとらえられる東アジア地域を考えて日本語の研究と教育を進めようとするときには、早く古代中国において創出

漢字・漢語のかたちとはたらき

——漢字圏の現在——

玉 村 文 郎

0 はじめに

「夏休みいうたかて、宿題たくさんあって、ストレスあるもん」

道路を歩きながら小学生が交わしたことばの中に「ストレス」という外来語が使われたのが耳に残った。児童がこのような外来語を使っているところに、現代日本語の一面が見られるかもしれない。後に触れるように、現在問題になっている外来語の言い換え^①も、個々の語の質と量の両面で、他の語種との関係が特に使用の場において問われているわけである。また法相の諮問機関である法制審議会の人名漢字追加案をめぐり^②一般市民や学識経験者の意見にも漢字の制限に対する賛否や好悪の感情が見られた。さらに文化庁が2004年7月に発表した調査結果^③には、常用漢字以外の難しい漢字の使用について抵抗感が少ないことが読みとれる一方で、慣用句の中の漢語には意味の取り違えが過半数になることがわかり、情報機器と現代の青少年・成人との関わり的一端をうかがわせるものとなっている。

現在、日本では漢字仮名交じり文が行われていて、〈漢字〉の習得が日本人にも日本語学習者にも、単に必要であるだけでなく、きわめて重要な事項となっている。かつて、明治以後の漢字使用率の減少傾向から推論して、早ければ2031年、遅ければ2191年に漢字使用がなくなるかもしれないという報告^④が行われたことがあった。若い世代の日本人の〈漢字離れ〉もさまざまな調査によって明らかにされていて、議論の種となっている。しかし、現在はワードプロセッサやパーソナル・コンピュータなどの発達と普及により、漢字の学習や運用のための負担が大幅に軽減され、漢字のもつ伝達効率の高さが、あらためて見直されるようになってきており、無意識裡に漢字の伝達効率の恩恵に浴している人が多い。しかし、このような現代の状況が、日本人の漢字使用を以前より確かなものにしたわけでは決してない。「位時代」（暗い時代）、「抗議開始日」（講義開始日）、「依然」（以前）、「交渉中」（考証中）、「判事 A」（判じ絵）、「理科の冠」（李下の冠）、「講演会の会費」（後援会の会費）等々、多くは同音語ないし類音語の間で誤変換が生じ